

もうひとつの韓流がここにある...

ドキュメンタリー映画

# 赦し

會社  
その遙かなる道

## 「赦し その遙かなる道」仙台上映会

(ドキュメンタリー映画・100分)

日時：2010年11月6日(土)午後1時半～4時

午後1時半～上映

お話：崔 信義さん(弁護士)

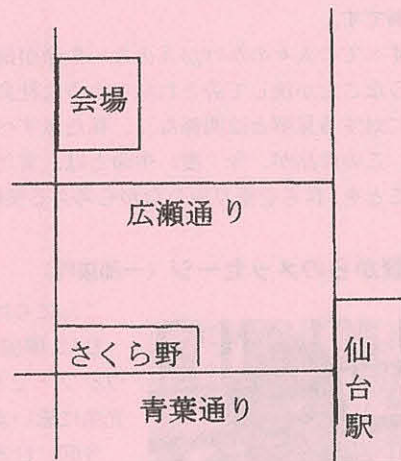
場所：カトリック元寺小路教会

(仙台市青葉区本町1丁目2-12 仙台駅徒歩10分)

参加費：500円

主催：死刑廃止連絡会・みやぎ

(連絡先：261-4251相良)



残虐な殺人犯罪の犠牲者たち——愛する妻と母親と一人息子のすべてを殺され、絶望に悶え苦しむ父親。ひとりの殺人者のために3人の兄弟を次々と失いひとり残された弟は、消えやることのない憎悪を糧に、一日一日を生き延びる。究極の状況で、残された者は、自らが生きるため、殺人犯を赦す道を選択する以外になかった……

生きるとは、愛とは、そして赦すとは、一体なにを意味するのか？そしてそれは本当に可能なのか。私たち現代社会に生きる者すべてに対して、究極の問いかけを突きつける感動のドキュメンタリー問題作。竹下景子さんのナレーションによる日本語版が完成しました。

## ドキュメンタリー映画『赦し・その遥かなる道』



韓国の代表的な民放社であるSBSが、一般劇場公開用として制作し、2008年の秋に上映された本作品は、最近の映画のように、残虐でショッキングな映像やあるいは扇情的な場面も含まれておらず、また息をのむほどの美しい画面で構成された映画でもありません。終始抑えた展開と地味な映像で一貫して構成されており、当初の予想通り、商業的な成功とは無縁の状態を終演しました。しかしその内容は、現実に存在する、これ以上ないほどの残忍な苦痛や絶望、消えることのない憎しみ、究極的な人間の強さと脆弱さ、そして想像することも出来ないほどの崇高な人間性を謳ったものであり、この映画を観た少数の人たちの心を強く揺さぶりました。

偶然、この作品のことを知り、同じく強い感銘を受けた者のひとりとして、私たちは、「赦し」というものを忘れ、失ってしまった日本の現代社会にこそこの作品を紹介したいと思いました。そうして、各方面のご協力を得て、その日本語版DVDをこの度、制作することになりました。

この作品は、ご覧になれば分かるとおり、死刑反対を訴えるために作られた映画ではありません。

無惨な犯罪の犠牲となった被害者遺族の方々を中心に、愛する者を殺された人々のこれ以上ないほどの苦痛と喪失感、殺人者と社会に対する憎悪、また反対に、殺した者の許されることのない痛恨。誰しも耐えることができない大きすぎる苦痛に打ちのめされ、それを身悶えし、のたうち回りながらも、それぞれが究極の選択で乗り越えようとする人々——死刑という人間の作ったひとつの社会制度に関する映画ではなく、人間と人間性そのものに関する映画です。

すべての人々のかけがえのない生命が最大限守られ、無用に奪われるようなことが決して許されないような社会——これは、死刑制度の存続・廃止に対する見解とは関係なく、私たちすべてがその実現を目標とする社会です。この作品が、今一度、生命とは、また生きるとは何を意味するのかという問いを、自らを振り返りながら考える契機となることを願ってやみません。



### 監督からのメッセージ（一部抜粋）



こんにちは。

私は、韓国の民間放送社であるSBSで、ドキュメンタリーの制作を担当しているチョウ・ウクフィです。今回、私の作品を通じて日本の皆さまにお目にかかることができ、大変光栄に思います。

今回、日本の皆さまにご紹介するドキュメンタリー映画〈赦し・その遥かなる道〉は、私が2004年から2008年まで、約4年間のあいだ、殺人被害者遺族と、殺人を犯した死刑囚たちを取材し、記録して制作した作品です。

……社会はますます複雑になり、人間関係もやはり、ますます苦しいものになりつつあります。競争は激しく、私たちはよりしばしば、自らの人間性をテストされるようになりました。不完全な世界を生きていく不完全な私たち人間にとって、赦しとは事実上、不可能なことなのかも知れません。だからこそ、「赦し」とは、人間の為す行為の中で、神にもっとも近づくものだとされているのではないのでしょうか。……犯罪の無い社会が不可能であるならば、私たちは、私たちの周辺にいる犯罪被害者の方々を、温かくいたわらなければいけません。彼らにいたわりを受けることができず、自分の運命とこの社会を怨むことになるとしたら、また新しい不幸と悲劇が生まれるからです。

この世界は、これから益々、人が生きて行くのが苦しい社会になっていくのかも知れません。

しかし、その中には、自分に過ちを犯した人を赦そうとして悶え苦しむ、弱く、そして偉大な人間も共に生きていくのです。

そのような人々が作り上げていく社会は、やはり生きる価値のある世界でありましょう。……

2010. 4. 20 趙旭熙（チョウ・ウクフィ）